

## 戦時下の国民生活 一空襲による国民生活の崩壊一 (高校日本史B)

### 1 はじめに

近代日本は、日清・日露戦争や第一次世界大戦などの数次にわたる対外戦争を経験することで国際的地位を高め、列強の一員として認知されていた。しかし、第一次大戦後の日本の動向に対して列強は警戒心を強め、満州事変による満州国建国とそれを契機とした国際連盟からの脱退が、連合国との対決を決定的にし、国内のファシズム勢力の台頭とも相まって、日中戦争・太平洋戦争の開戦へと至る。

真珠湾奇襲攻撃とマレー半島上陸に始まる太平洋戦争は、緒戦こそ勝利を取め、広大な地域を制圧して軍政を布いたものの、アメリカは圧倒的な物量を背景に反撃態勢を整え、ミッドウェー海戦以降、日本軍は各地で全滅と撤退を余儀なくされてゆく。

そうした中で、国民生活も否応なく戦時体制の厳しい管制下に置かれるとともに空前の戦禍にみまわれ、国民生活と日本経済は急速に崩壊していった。特に、米軍による本土空襲と空襲被害の錯綜こそが、戦時下の国民生活を象徴するものであるともいえる。

近代日本が行き着いた到達点と現代日本の出発点が、灰燼と化した焦土にあったと考えると、空襲による惨禍を学習することはとても重要であると思われる。

### 2 指導計画

#### 「第二次世界大戦」

- ・三国防共協定～日中戦争
- ・戦時統制と生活～戦時下の文化
- ・第二次世界大戦の勃発～新体制と三国同盟
- ・太平洋戦争の始まり～戦局の展開
- ・国民生活の崩壊～敗戦（本時）

### 3 資料について

- ・資料①「灯火管制指導参考」
- ・資料②「家庭防空群指導関係書」
- ・資料③「空襲時に於ける工場・鉱山・事業場従業員の心得」
- ・資料④「空襲警報・同解除の覚」
- ・資料⑤「前橋の戦災」(写真)

### 4 授業実践例

| 学習活動                                 | 支援及び留意点                                       |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------|
| ○資料①を見て、「灯火管制」とは何のためのものか考え、発表する。     | ・「直射光が窓から出ます」に注意させ、考えさせる。                     |
| ○戦場ではない一般国民の生活さえも戦場同様の危険の中にあったことを知る。 | ・毎日の国民生活が厳しく統制され、それが米軍機の襲来に備えたものであったことに気づかせる。 |
| ○これまでの学習から、本土空襲を警戒したことにつながる。         | ・国民が警戒したのは米軍機のような攻撃だったかを考えさせる。                |

|                                                                                                |                                                                                                                        |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ○資料②を見て、各家庭に空襲対策の指示が出されていたことを知り、中でも「焼夷弾」による火災対策に重点が置かれていたことを知る。                                | ・家庭で、特に主婦を中心に空襲対策、防火対策の指示が出されていたことに気づかせる。                                                                              |
| ○資料③を見て、各工場などの職場においても空襲対策の指示が出されていたことを知る。                                                      | ・戦時下の工場、特に軍需関連工場は、戦争遂行のための重要な施設であったので、「戦災覚悟で職場を守れ」などの厳しい指示が出されていたことに気づかせる。また、そうした工場には、学生・生徒や女子挺身隊の女子が働労働員されていたことを説明する。 |
| ○資料④を見て、感じることを、わかることを発表する。(1日のうちに「警報」「空襲」「解除」が繰り返されていたことや「焼夷弾落下」など)                            | ・「空襲警報」「解除」「空襲」の文字に気づかせ、日常生活が困難になっていた様子や、「焼夷弾落下」などから実際に被害が出ていることに気づかせる。                                                |
| ○これまでの授業の内容を確認しながら、資料⑤を見て、どんな状況を写した写真か考える。                                                     | ・「灯火管制」や「空襲対策」を確認した後写真を見せる。                                                                                            |
| ○一夜にして500名以上の犠牲者が出た8月5日の空襲について理解し、「灯火管制」や「空襲対策」などが無意味なほどの規模の空襲であったことを知る。                       | ・前橋空襲(8月5日)について説明し、「灯火管制」「空襲対策」などの効果について考えさせる。                                                                         |
| ○前橋以外にも高崎や太田など、全国の中小都市にまで空襲は及び、国民生活が直接的に崩壊していったことを考え、軍需工場も攻撃対象であったことから、勤労働員で犠牲になった人も多かったことを知る。 | ・空襲が国民生活を崩壊させていった具体的な状況や、戦争の局面が重大な事態に入っていたことを理解させる。                                                                    |
| ○前橋空襲の翌朝、広島へ原爆が投下されたことを知り、恒常的な空襲の延長上に原爆投下があったことを理解する。                                          | ・本格的な日本軍の迎撃がないなかで空襲が恒常化し、そうした状況が原爆搭載機が容易に日本上空に飛来して原爆を投下することを可能にしたことに気づかせる。                                             |
| ○太平洋戦争はそうした一般国民に多大な犠牲を強い悲惨な戦争であったことを確認する。                                                      | ・太平洋戦争の悲惨さを際立たせているのは、本来非戦闘員であるはずの一般国民までもが、戦場同様に生命の危険にさらされ、多くの人が犠牲となったことに気づかせる。                                         |

### 5 まとめ

1945年(昭和20年)8月5日夜10時頃、足利市方面から飛来したB29約90機は、2時間におよび前橋の市街地を中心に焼夷弾や一般爆弾を投下した。市内各所では猛烈な火災が起り、死者535名、負傷者約600名、焼失破壊家屋11,518、罹災者60,738名にのぼり、市街地の約80%が焼失した。(前橋の罹災人口率は、東京よりも多い65%で、罹災人口率の高さは全国の都市のなかで1位) 空襲の凄まじさは言語を絶するもので、資料①～⑤に見られる空襲対策が、本格的空襲の前では無力に等しかったことがうかがえる。そうした、為す術もなく焼き尽くされ、破壊され尽くしてしまうことが、空襲の悲惨さや恐ろしさの本姓であり、太平洋戦争のもたらした惨禍の象徴のひとつであろう。

そうした戦争の惨禍を学習するうえで、空襲の実態を示すこれらの資料を授業に活用することは非常に効果的であり、しかも身近な地域に関するものであれば生徒の興味を喚起することももうろう。また、「戦争を知らない世代」が「戦争に関する知識を知らない」ままになっているようにするためにも、こうした資料の内容を伝達してゆくことは、教育現場に限らず、社会全体で取り組むべき課題であるようにも思われる。

※この実践例に使用した資料の中には、当資料集に未掲載の館蔵資料があります。